第224回(2月）

「95年アメリカ経済のゆくえ―日米関係を中心に」

ワシントン・ポスト紙 極東総局長 T. R.リード氏

今度の阪神大震災報道を通じて、多くのアメリカ人は、日本人の我慢強さ、精神の強靭さに対して心から感心し、尊敬の念を強く持った。他方、政府の態度を傲慢以外の何ものでもないと感じている。ただルーツは１つである。日本という国、日本人という国民は、いったん決められたルールを守ることを重視する国であり、そのでき上がったルールをどこまでも維持しようとすることが大好きな国民だということである。日本の市場開放が進まない背景がここにある。

アメリカのマスコミが日本の貿易黒字を根拠に日本市場の閉鎖性やアンフェアな取引慣行を攻撃している結果、一般のアメリカ人は、日本に対して不安をつのらせ、いつの間にか日本をアンフェアな国だと考えるようになった。この日米摩擦の問題は、アメリカ経済が大不況にみまわれた86年～92年対日要求は特に厳しかったが、92年～93年アメリカの景気回復とともに日本バッシングは下火になり、94年の中間選挙のキャンペーンでも、日本問題はほとんど争点にならずに終った。そして、このアメリカの好景気が続く限り、96年の大統領選挙でも日本問題は大きな争点にはならないだろう。それほど現在のアメリカの景気は強いと見てよい。

93年、「チェンジ」を訴えたクリントンの大統領就任を機に、産業界は自信を回復し、企業は輸出を伸ばし、アメリカ経済は急速に回復した。更に、ＮＡＦＴＡの成立が輸出振興に大いに役立った。

アメリカ人は、常に国家に対して強いリーダーシップの発揮と、それを可能にする強力なリーダーの出現を待望している。クリントンのリーダーシップに対する期待が崩れれば、とたんに人心は離れていく。しかし、今の政治家の中に強いリーダーシップを持った人は見あたらない。アメリカにおいて支持されるリーダーとは、レーガンのように、自分自身に対する絶対の自信を持っていることである。

最近、アメリカは、将来のアメリカのコンペティターとしてアジアを視野に入れて、アジア指向を強めている。しかし、いまだ多くのアメリカ人は、経済上のコンペティターはヨーロッパと日本であり、中でも日本を第１の競争相手と見ている。ただ、中国が将来世界一のパワーも持つときには、中国がアメリカのコンペティターになる。